

盲老人の豊かな老後を求めて

特定非営利活動法人全国盲老人福祉施設連絡協議会（略称：全盲老連）

はじめに

現在、国内には視覚に障害を持つ人が約31万人おられます。これは厚生労働省の調査による身体障害者手帳所持者数の事で、日本眼科医会からは手帳を持たない失明者に加えて、矯正視力が低いロービジョン（弱視）といわれる人も含めると、約164万人おられると言われています。構成する年齢層は半数が70歳以上、60歳以上では70%を超えると推定されています。このように現代社会においては先天性の方よりも、生活習慣病罹患率の上昇やストレス等の後天的な要因により障害を負うケースの方が多くなっている状況が伺えます。このような中途失明者へのケアについては、精神的にまた身体的にも高い専門性が必要となります。

全盲老連の歩み

当法人は昭和43年に設立された任意団体（全盲老連）を母体として発足しました。昭和36年に我が国最初の盲老人ホームが奈良県の壺阪寺境内に創設され、そのあと昭和39年には東京、また41年には広島にもでき、「視覚に障害を持つ高齢者への福祉の向上」という志を抱いてスタートした全盲老連の輪は、全国的な広がりを見せ、当初わずか4施設から始まった取り組みも、今では盲老人ホーム51

施設、特別養護老人ホーム28施設、ケアハウス1施設に加えて、同じ感覚障害者である事から聴覚障害高齢者専用の老人ホーム3施設も加わり、加盟施設数は83施設、入所定員は5,317名となり、年数回の職員研修会の開催や、高齢視（聴）覚障害者への福祉を取り巻く実態調査結果を当時の厚生省に提出する等、自主的な活動を行ってまいりました。創立以来40年余りの間、任意団体として活動しておりました「全盲老連」を、平成23年には特定非営利活動法人として再編し、我が国最初の盲老人ホームが誕生した奈良の地に本部を設置して現在に至っています。この間、平成30年には創立通算50周年を迎えた団体であります。発足当初から目標としていたのは、全国各都道府県に1施設以上の盲老人ホームの設置でしたが、近年3県に整備されたものの富山県、栃木県、鳥取県、沖縄県には未だ設置されておらず、達成されておられません。これからも超高齢化とともに増えるであろう高齢視（聴）覚障害者の豊かな老後を求めて、多様化する諸問題に、積極的に取り組んでまいります。

主な活動内容

①各職種別研修会等の開催

盲老人ホームでは一般的な高齢者のホームとは違い、点字への理

解や、入居者からは「声には表情がある」と言われるように、対象者が少数でありながら、自立生活に向けてのリハビリやレクリエーションにおいても、そのケアには高い専門性が必要となります。そのため視覚障害者ケア専門技術認定講習会の開催や、実情に即した職種別（施設長、生活相談員、ケアワーカー、新任ケアワーカー等）の研修会によって、職員の育成を行う事が最重要課題であります。近年では聴覚障害者専用老人ホームもこれらに参加し、互いに研鑽する事により増えつつある視聴覚（重複）障害者への対応についても学んでいます。また、ハード面においても、誘導用手摺や誘導チャイム、点字ブロック等の可能な限り自立生活を送って頂くのに、安全上欠かす事の出来ない設備等の情報や生活に潤いを感じて頂く為の盲人用器具類等においても、最新の情報交換や共有が有効でそのような機会も必要と考えています。

②福祉講演会の開催

各分野で活躍されている著名な方を招いて講演会を開催し、一般の方々にも拝聴して頂く機会を設けると同時に、視覚、聴覚に障害を持つ高齢者の福祉に関する啓発、広報を行います。

※実績（著名人）：五木寛之氏（作家）、石井めぐみ氏（女優）、有森裕子氏（元オリンピックマラソンランナー）等

③盲老人福祉向上の為の調査研究活動

今後、克服すべき課題や制度上の問題点とされるところを検証し、対応策についての研究や働きかけを行います。

④顕彰事業「太陽福祉文化賞」

視覚・聴覚障害者へのボランティア活動を実施している団体や個人への顕彰、及び加盟施設職員の永年にわたる勤続や功労への顕彰又職員が行った優れた研究活動への顕彰を行います。

⑤老朽化した盲老人福祉施設・設備の更新への補助事業

手摺や誘導チャイム、点字ブロック、誘導ロープ等、盲老人ホーム特有の設備更新のサポート

⑥プラットホーム転落防止設備の設置促進事業

視覚障害者が安心して電車を利用できるように、駅のホームに転落防止柵を設置してもらえるように関連方面に働きかけを行っています。

⑦在宅の視覚・聴覚障害者への専用老人ホームの紹介

ご自宅等で生活されていて、お困りの視覚・聴覚障害者に加盟施設の紹介を行います。

⑧盲老人ホームの設置促進事業

盲老人ホーム未設置の県への設置促進に関する支援や増築等への協力を行います。

研修参加職員からのコメント…

- ・入居費用は個人の収入区分により異なりますが、平均負担月額約46,000円
- ・介護保険サービスの利用状況
※養護盲老人ホームは基本的には介護保険施設ではなく、入居者は個別契約により利用は可能
・要介護度の認定をされた入居者⇒32.1%（中重度の要介護3～5は19.5%）
・介護保険サービスを利用している入居者⇒37.4%その内最も多いのは訪問介護（71.7%）
- ・障害福祉サービスの利用状況
・「受けていない」96.2%
・「受けている」3.8%⇒同行援護35.8%・日常生活用具29.2%
- ・在宅復帰できない理由
・養護する近親者が居ない…34.3%
・日常生活機能の低下…12.7%
・視覚障害…12.4%
- ・医療ニーズのある入居者
・「薬の管理」が最も多く86.7% 次に「インスリン注射」5.7%
- ・年金取得の状況⇒障害基礎年金（55%）／老齢基礎年金（12.3%）／遺族基礎年金（9.8%）
- ・特別支援学校（盲学校・ろう学校）を経験した入居者
・盲学校経験者⇒18% ・ろう学校経験者⇒1.4%
- ・就労経験⇒「有」約7割（73.5%）

調査にご協力いただいた入居者からのコメント…

（家庭的な温もりと充実した毎日に感謝）

私は、生まれた時から小角膜症・脈絡膜欠損という病気で、両親の顔もはっきりと見ることができませんでした。そのため小・中学校でも十分な勉強もできず、また家でもこれということもできず、親が将来のことを心配するので、盲学校に入学してマッサージの資格を取得しました。一生懸命にマッサージに打ち込み30年頑張ってきたが、年老いた母を安心させるため、今後のことを考え、9年前に盲老人ホームに入れていただきました。

住み慣れた家を離れて、新しい環境になじめるか心配でしたが、最初感じたことは、家庭的でほんのりとした温かさでした。日々過ごしているうちに、職員さ

んの手や眼を借りてですが、できることが増えてきて、眼が見えなくとも何でもできることがわかり、初めての事にも挑戦してみようという気持ちになりました。今では趣味も増え、毎日の充実した楽しい人生に感謝の気持ちでいっぱいです。



秋篠宮両殿下、加藤厚生労働大臣にお越し頂いて、創立（通算）50周年記念式典を挙行了しました（平成30年）

害時期によってお一人おひとり、できること・必要とすることが異なります。ご自分でしたいことやできることを共に考え、それを実現するためにお手伝いしています。

生きる力を持っていただけるよう、よりその方らしく前向きにいきいきと安心して暮らしていただけることを、私たちは目指しています。

また、施設ご利用者の方だけでなく、眼のご不自由な在宅の方々のご相談に応じたり、正しい視覚障害への理解を深めてもらえるようご利用者・職員共に力を合わせて、視覚障害者福祉・地域福祉の拠点となるよう励んでいます。

加盟施設（盲老人ホーム）の現状…近年3年間の入居状況調査結果から

- ・調査対象：盲養護老人ホーム48／聴覚障害養護老人ホーム2→50施設
- ・入居定員：2,924名
- ・現入居者：2,835名……入居率97%
- ・年齢構成：平均年齢（男）⇒77.4歳…75～80歳未満が最も多く27.4%
平均年齢（女）⇒81.1歳…80～85歳未満が最も多く23.8%
男女比は1：2
- ・入居年数：平均入居年数⇒8.3年…0～5年未満が最も多く41.6%
- ・退居理由別人数：最も多くは死亡⇒60.2% 次にその他の17.4%（内長期入院は96.7%）
※特別養護老人ホーム（介護保険施設）への転居は9.7%で年々減少傾向
- ・視覚に障害のある入居者数（身体障害者手帳ベース）
視覚障害⇒93.6%（1級：1,846人⇒入所者全体の68.9%）
（2級：546人⇒入所者全体の20.4%）
※1・2級合わせると約9割（89.3%）…中途失明者の割合は約7割（66.8%）

全盲老連ロゴマーク

視力検査でおなじみのランドルト環は万国共通の指標。重なり合う3つの輪は「盲老人」、「職員」、「地域の人々」の3者を意味し、互いに深い理解と力強い絆で結ばれ、全盲老連という大きな和となる事を表現しています。また、黄色は心の光を、青は「安心感」や「やすらぎ」を示しています。



全盲老連
NONPROFIT ORGANIZATION
NATIONAL COUNCIL OF THE HOMES
FOR THE AGED BLIND JAPAN



顕彰事業（太陽福祉文化賞）



職種別研修会（ケアワーカー）